

異端者、桃太郎 03稿



20260708



エリー



目次

1、おわりとはじまりの日	1
2、孤独	3
3、部下たち	6
4、問い	9

1、おわりとはじまりの日

○事実

昔なのか、未来なのか、分からない、時空の狭間に、太郎と花子と智 (さとし) という村の若者がおった。

太郎は花子の1 枠で、花子もまた太郎の1 枠で、二人は互いを見詰め合っておった。

あぶれた智の1 枠は学問だった。戦乱の世に問うべき「質問」を探しておった。

思い詰めた智は、一人で旅立とうとした。

しかし、太郎も花子も、智を一人で行かせはしなかった。太郎の父ちゃん手製の刀と、花子の母ちゃん手製の法被を太郎に着せて、旅立ちを見送った。法被には三人の名前が入っていた。遺品として持ち帰られるようにだ。

○反応

そして10 年が過ぎた。

村には父も母もいなかった。

ただ荒れ果てた太郎の家だけが、かろうじて立っていた。

どこもかしこも、戦に飢え、病ばかりだった。敵を倒しても意味がない。なぜなら、敵もまた苦しむ民だからだ。

この世を貫く、問いは何か？

何に答えたら、争いは終わるのか？

智は始まりの地に戻り、宿敵の鬼の住みかに近づき、思索することにした。

「さとし、いくな！」

「やめなよ、さとし」

「答えがわかるなら、命など惜しくないわい」

後ろをむいたまま、手を上げ、智は去った。

○認知

もう誰にも智を止められないことは分かっていた。

後に残された太郎と花子は、急に腹が減っていることに気づいた。

魚でも釣ろうと、川に近づくと、おおきな桃がどんぶらこっこ、どんぶらこっことかづいてきた。

太郎と花子の二人がかりで持ちあげ、あばら屋に置くと、パカーンと桃が割れ、赤子が泣き声をあげた。

刹那、赤子は桃を食い始めた。

するとみるみる成長して、赤子は青年になった。そして名乗った。

「俺は桃から生まれた桃太郎。よろしくな！」

○行動

さすがに世界を渡り歩いた太郎と花子。少しも動じず、返事を返した。

「食い扶持分は働いてもらうぞ」

「わかってらぁ」

手を掛けた赤ん坊ではなく、いきなり青年として現れた桃太郎に、二人の1 枠は揺るがなかった。

桃太郎は、二人を見て、誰かの1 枠になりたいと願った。

2、孤独

○事実

太郎と花子と桃太郎は、太郎の実家を修理した。

桃太郎は案外役立つ奴で、テキパキと仕事をした。

どこで覚えたのか、桃から受け継いだのか、桃太郎にも分からなかった。

○反応

家の修理が終ると、三人は囲炉裏で魚を焼いて食べた。

ふー、ふー。

ふー、ふー。

太郎も花子も息を吹きかけて、焼き魚を冷ます。

そして、互いに差し出す。

「太郎、食べ頃だよ」

「花子、こっちも食べ頃だ」

交換して食べ始めた太郎と花子をみて、桃太郎は突っ込む。

「意味なくない！？」

しかし、自分の魚にかじりついたら熱かった。

「熱っ！！！」

それを見た花子が笑った。

「あんたもぶいんぶいんの若い娘と、ふーふーしあって食ったらあつくないよ」

「けっ」

自分でふーふーするのもしゃくだから、魚を振り回して冷ます負けず嫌いの桃太郎を見て、太郎も花子も涙を流して大笑いした。

○認知

どうすれば、ぶいんぶいんの娘の1枠になれるか、太郎は考えた。

自分の長所は強さなんだから、悪い奴をぶちのめしたら、「キャー、スキテ」となるかもしれん。

そんな妄想をしながら暮らしていると、桃太郎は太郎に柴を売ってくるよう頼まれた。

背負子に5つ、両手に3つずつ、柴を持って、村に売りに行った。

すると待っていた場面に出くわした。

「きゃーっ」

若い娘の怯えた声に、桃太郎は柴を投げ捨て、駆けつけた。

赤い肌をしたそいつは、皆から「鬼」と呼ばれていた。

桃太郎は迷わなかった。

若い娘の前に立ちはだかり、鬼に強烈な右ストレートをぶち込んだ。

鬼は吹き飛び泡を吹いて倒れた。仲間の小鬼が連れて逃げた。

こんな勇姿を見たら、きっと娘は……振り替えると娘は怯えていた。

鬼も去ったこの場で、間違いなく桃太郎だけを見て、震えていた。

それは鬼を見た目と同じだった。

泣きたい気持ちをこらえて桃太郎は言った。

「誰か、柴を買ってくれ」

するとヘコヘコしながらジジイが近づいてきた。

「娘の父でございます。助けていただいてありがとうございます。しかし」

小判を握らせながら耳元で囁いた。

「あなたさまを狙って鬼が来る。すぐに旅立ちなさい」

ジジイは桃太郎の肩を叩き、落ちた柴を使用人に拾わせて、娘を連れて家に入ってしまった。

桃太郎は、カラの背負子を拾い、走って逃げ帰った。

○行動

柴 11 束で小判 1 枚という金額。

桃太郎の右手の赤く腫れた拳。

すべてを察した太郎と花子は、飯を山盛りよそって桃太郎に食べさせた。

桃太郎はそこそこ賢かった。

旅立ちの祝いの飯だと分かっていた。

鬼を殴り倒した桃太郎は、鬼と同じくらい強い。つまり怖い。

しかも、鬼が報復に来る。

それでも桃太郎は、太郎と花子だけには、恐れられなくなかった。

グチグチなやむのはカッコ悪いと考えた桃太郎は、あえて自分から聞いた。

「鬼並みに強い、俺が怖くないのか？」

太郎は豪快に笑った。

「桃太郎くらい強いやつはいくらでもいる。俺らは広い世界を3人で旅して、自分より強い敵と、何度も戦った。勝負は力だけでは決まらない」

花子も笑いながら言った。

「確かに生まれ方は変わっているが、誰かが桃をくり抜き、赤子を入れて、川に流したのだろう」

「なんのために？」

「川上で戦でもしているのだろう」

桃太郎は黙って考え込んだ。

そして、その夜、一人でこっそり出ていく決心をした。

土間に向かうと、月明かりに大きなずた袋が照らされていた。

中にはくたびれた法被と刀ときびだんごが詰まった木箱が入っていた。

桃太郎は法被を羽織り、戸口から外に出た。

寝たふりをしている太郎と花子に感謝の一礼をすると、鬼の村へ向かった。

3、部下たち

○事実

猟犬、番犬が好まれる荒々しい世界で、白くてフワフワのポメラニアンに需要はなかった。

「かわいいけどさー、あんたみたいなちっこい、よわちい犬の血が混ざったら、猟犬や番犬にならないよ。ごめんね」

「いいんだワン！」

なでてはくれる。エサもくれる。でも……飼ってはくれない。

そんなポメラニアンを「イヌ」と呼び、サトシは仲間にした。

「イヌ、おまえのフワフワした毛なら、1回は急所をまぬがれるだろう。痛いけど死にはしない。だが敵をあなどるな。二度目はない。次は確実に当ててくる。つまり死ぬ」

いつか、サトシを守るため、ポメラニアンには死ぬ覚悟ができていた。

○反応

ついにサトシは長年の問いの答えを得た。

しかしタイミング悪く、鬼におそわれている最中だった。

「分かったぞ、戦う目的を問え！」

ポメラニアンはサトシを守るため、鬼の前に立ちはだかった。

しかし、サトシは、ポメラニアンをつかむと、遠くへ投げ飛ばした。

「行け。キジに伝えろ。行ってくれ！」

ボコボコに殴られ、死にかけているサトシを残して行けるわけがない。

だが、サトシは悲願の問いを見つけたのだ。ポメラニアンには扱えぬ問いを。

迷った末、ポメラニアンはキジに届けることを選んだ。

一撃耐えてもサトシを守れないなら、キジに伝える方がいい。

○認知

キジには考える力がある。

サルには悪知恵がある。

ポメラニアンには、一撃だけ耐えるフワフワの毛がある。

なのにサトシを見捨てたことが辛くて、ポメラニアンは自分を責め続けた。

キジに問いを伝えたという事実だけが、ポメラニアンの支えだった。

そして今、三匹で焚き火を囲み、鬼と戦うものに、サトシの問いを突きつけるため、あてもなく待っていた。

チャンスは意外と早くやってきた。桃太郎と名乗る青年が現れたのだ。

「こんなに早く現れるなら、あの時、サトシに逆らって立ち向かっていたら……」と後悔に押し潰されそうなポメラニアン。次こそはなにがあっても逃げないと誓う。

そして、一番頭の切れるキジが、サトシの問いを、桃太郎に問いかけた。

「鬼を退治するとは、どういう状態を表すのか？」

「全員ぶん殴る」

ポメラニアンは思わず、聞き返した。

「赤ちゃんも殴るのかワン？」

桃太郎が返事に詰まっていると、キジが再び問う。

「桃太郎、お前の目的はなんだ？」

「村人に受け入れてもらうことだ」

黙っていたサルが初めて口を開いた。

「鬼を皆殺しにした桃太郎は、鬼より怖くねえか？」

ポメラニアンは同調した。

「鬼とはいえ、赤子をぶん殴った桃太郎は、怖いワン」

イライラと桃太郎が怒鳴る。

「じゃあ、どうすりゃいいんだ！」

「俺らが偵察してきてやる。桃太郎はここで待っている」

「信用できない」

キジと桃太郎がにらみあう。

「お前の父の太郎、母の花子は、俺らの師匠サトシと仲間だった。その衣装の内側に、三人の名前が書いてある」

桃太郎は、太郎、花子、智の文字を見て、首を横に振る。

「俺は字が読めない」

サルが血のついたボロボロの布を桃太郎に見せる。

「読めなくても同じ文字と分かるだろう？」

智と書かれた布を見て、桃太郎がうなずく。

「わかった。お前らに任せる」

桃太郎はずた袋から、菓子折りを出した。

「お礼はこのきびだんごでどうだ？」

3匹はうなずいた。そして、

20個あるきびだんごを5個ずつキジがわけた。

○行動

キジの報告では、鬼の村には桃畑がある。桃は体を大きくする役割がある。しかし、適合しない場合、リスクがある。

大きくなった体を維持するために、「牛」という生き物を飼って、その乳を飲み、肉を食い続けねばならなくなる。

適合したものが桃を食べば、さらに強さが増す。維持に乳も肉も必要ない。

しかし、適合するものは少なく、肉を食うから、村人より強い鬼がほとんどだ。食うのをやめれば元に戻る。

つまり、鬼も人間なのだ。

そしてサルとキジの報告では、牛は牧場に集めて育てられているため、入り口を開き、牛たちを追いたてれば逃げ出すだろうと策略を告げた。

最後にポメラニアンが話した。かわいさで村長の娘に取り入ったポメラニアンは、「鬼の世界は契約で成り立つ。村長の印鑑を持つものが権力を得る」という重大な情報を伝えた。

そして、サルとキジが夜明けと共に牛を逃がして、鬼が出払ったところで桃太郎が村長の家に行き、印鑑を奪い取ることに決まった。

サトシを見捨てたポメラニアンは、まだ幼い鬼の村長の娘の命だけは守ると心に誓い、桃太郎を案内した。

「フカフカでかわいい」となでてくれた、娘の手のぬくもりをポメラニアンは忘れない。

4、問い

○事実

キジとサル作戦は見事に成功して、トントン拍子にポメラニアンと桃太郎は、鬼の村長の家についた。

中にいると、赤い肌をした小娘がポツンと部屋の奥に正座していた。

「村長の印鑑を渡せば見逃してやる」

娘は首を横に振った。

「印鑑はわたしの腹にあります。切り裂いて取り出すしかありません」

桃太郎がこぶしを振り上げると、ポメラニアンが鬼の娘の前に立った。

「他の方法はないのかワン？」

「村長だけが、わたしを殺さずに印鑑を取り出せます。しかし、父はわたしの命より印鑑を守るでしょう」

その時、扉から鬼が雪崩れ込んできた。

○反応

桃太郎は、反射的に、鬼をバッタバッタとなぎ倒し、大暴れした。

一撃で倒れないものには、舌打ちして、蹴りをかました。

あまりの強さに、鬼たちが「命だけは助けてください」と懇願し始めた。

思わず、桃太郎は叫んだ。

「俺は化け物じゃない！ ヒトだ！」

叫びに答えたのは、片目を失った老いた鬼だった。

「お前は化け物じゃないヒトだ。そして俺たちも鬼じゃない。ヒトだ。俺たちは、お前を仲間として受け入れる。契約を交わそう」

娘が老いた鬼に飛びついた。

「お父さま。来てくださると信じてました！」

長老が娘の腹に手を当てると、すうーと印鑑が出てきた。

○認知

桃太郎は考えた。

鬼は、牛の乳と肉で体格がよくなっただけで、人である。

ならば、村人も牛を飼い、その乳と肉を食べれば強くなり、負けなくなるはずだ。

「俺たちはどちらも同じ人間だ。

お前らは桃と牛で強くなっただけだ。

つがいの牛をくれ。それから、村を襲わない契約を書け」

「断ったら？」

「皆殺しだ！」

ポメラニアンが娘をかばった。

「同じ人なら、どうしてこの子は助けないのかワン？ 矛盾しているワン！」

ポメラニアンの正論に、反射的に体が動く。一方で、心は冷静だ。怒りに震えながらも、矛盾することを願った。

避けろ、イヌ！

桃太郎は、ポメラニアンを思いっきり蹴った。

しかし桃太郎の期待は裏切られ、ポメラニアンは吹き飛び、壁に叩きつけられた。そして大量の血を吐いた。

それでも女の子の前に戻ってきて立ちはだかった。

「なぜ、よけなかった？」

これでは、桃太郎こそ、村を襲った鬼そのものではないか。

(いや、鬼より酷い。意見の異なる味方を蹴ったのだから)

(まだ引き返せる。殺戮者にならずにすむ)

(いや、もう遅い。この体は血まみれだ。このままではサルもキジも殺すことになるだろう)

(全員、殺す……のか？)

(村人も恐怖で支配するのか？)

(受け入れてもらいたいのではないのか？)

桃太郎はポメラニアンを右手で、娘を左手でつかんだ。

ぶつければ両方死ぬ。

(一番殺したくないものから手につければ……殺したくない？)

○行動

桃太郎はポメラニアンと娘を床に下ろした。

「世界を旅した父と母が言っていた。この世には鬼より恐ろしい生き物がたくさんいるそう。牛で村人を強くして、俺たちと鬼たちが組んだら、負けねえ。俺が負けさせねえ。どうだ、話に乗らないか？」

やっと動けるようになった鬼たちが、桃太郎に襲いかかろうとしている。

すると今度は、ポメラニアンが桃太郎を守ろうとする。

桃太郎は思わず、ポメラニアンの行動に爆笑した。桃太郎より圧倒的に弱いくせに、守ろうとするからだ。

「お前はどっちの味方なんだよ！」

桃太郎がポメラニアンに突っ込むと、鬼たちからドッカンドッカン笑いが起きた。

鬼から見てもポメラニアンは滑稽なのだ。一番弱いからだ。

「えへへ」

照れ笑いするポメラニアンを見て、桃太郎はハッとする。

(強いから戦うんじゃない。守りたいから戦うんだ！)

ポメラニアンに教えられた桃太郎は、村長が差し出した手を握り返した。

そして、契約書が作られた。

桃太郎が雄牛に、サルが雌牛に乗り、村へ向かった。

そのまま村の広場へ行き、鬼の秘密を語り、牛を飼うことを説明した。

試しに乳を飲ますと、その旨さに虜になった。

こうして連合は受け入れられ、鬼を殴り殺さなかった桃太郎も村に認められた。

何より嬉しかったのは、あの時助けた娘が、桃太郎の手を握り、盆踊りに誘ってくれたことだ。

もう恐怖に怯えた目ではない。

人を見る優しい視線だ。

桃太郎は娘の1 枠になれた。

異端者、桃太郎 03稿

著 者 ELYE

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
